

第147回 ピンクとビューティが 少女たちを虜にした時代

昭和51年の夏、デビュー曲『ペッ
パー警部』を歌うピンク・レディー
を初めて見たのは、『11PM』だっ
たか『ザ・23』だったか忘れまし
たが、どちらにしても「ベッド体操」
や「女子運動会」など、お色気を売
り物にしてきた男性向け深夜番組で、
「ミニスカ&脚線美でアピールする
女性コンビの登場か」という男性目
線からの期待感をつのらせつつ見て
いたものでした。

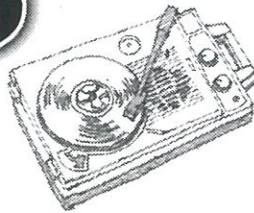
『ペッパー警部』（詞・阿久悠、曲・
都倉俊一）をあらためて検証してみ
ると、「あああ、あああ」という
吐息挿入が演出されていたり、夏の
夜に戸外で愛の言葉を交わし合っ
ているカップルの状況が週刊誌風に歌
われていたり、かなり刺激的に作ら
れています。都倉俊一が発案したと
される「ピンク・レディー」という
名称からはカクテル↓お酒↓大人の
社交場が連想され（米国では俗語で「娼
婦」も意味するらしいのですが）、キャ
バレーに出演するショーガールのよ
うな衣装からも、担当ディレクター

だった飯田久彦が男性向けセクシー
路線を狙っていたことが窺われます。
デビュー後の活躍は、ご存じのと

名曲カルテ

昭和歌謡と いまでも

堀井六郎
絵・松本浦



おり成人男性どころか日本中の小学
生から幼女までも虜にするモンスタ
ーになっていきますが、ピンク・レ
ディーとほぼ同時期に女子中高生に
絶大な人気を誇った二人の女子プロ
レスラー、ビューティ・ペアの存在
も忘れられません。

ピンク・レディーの二人と同学年
だったジャッキー佐藤と1学年下の
マキ上田が『かけめぐる青春』（詞・
石原信一、曲・あかのたちお）でレコ
ード・デビューしたのは、同51年11
月、ピンク・レディーのシングル第
2弾『S・O・S』発売と同時期で
した。年を越した昭和52年、ミー&
ケイに続くようにジャッキー&マキ
の人気に火が付きまします。試合前のリ
ングがテープで埋まる中、まるで宝
塚歌劇を思わせるような衣装で歌い
踊ります。少女たちの嬌声が沸きあ
がるシーンをテレビで初めて目にし
たときにはさすがに驚きましたが、
デビュー曲や次作
の『真赤な青春』
（ビューティ主演映
画の主題歌。岡田裕
介も出演）などは、
郷ひろみ『男の子
女の子』や西城秀



樹『情熱の嵐』のようにファンが掛
け声を入れやすいように工夫され、
アイドルソングとしても非常にうま
く作られていました。

ピンク・レディーとビューティ・
ペアに共通するもの、それはブレイ
クさせた貢献者が事前に想定してい
た男性ファンではなく、彼女たちに
本来備わっていた「魅力の本質」を
見抜いた少女たちだったことです。
それは、歌とダンスの上手なお姉さ
ん、強くてカッコイイお姉さんに憧
れる本能でもありました。

デビュー当時のピンク・レディー
に社交場のバニーガールや網タイツ
のダンサーを重ねたり、女子プロレ
スといえど見世物としての女相撲な
どと同一視していた私は、少女たち
のおかげで色眼鏡を外すことができ
ました。

やがてファンとして応援していた
少女たちは母となり、
その子供たちはダンス
とボーカルが融合する
音楽の世界に違和感な
く溶け込み、オリンピ
ックの女子レスリング
では数多くのメダルが
期待される時代になり
ました。